

世界の多様な言語の地平における「哲学史」の歴史

——コゼレックプロジェクトの最初の成果——

ロルフ・エルバーフェルト

有坂陽子・加藤哲理 訳

一 歴史的意識

歴史を「我々の過去」の歴史とする歴史的意識を育てるということは、我々の過去をある視点から語ることににより、それを自己のものとすることを意味している。そのような自己自身の過去の記憶を通して歴史的な自己理解が生まれ、それが潜在する未来への出発点となるのである。

すべての言語において、過去の歴史を「物語る」ことによつて最初の歴史的意識がすでに芽生えている場合があるとしても（物語的歴史化）、大抵の場合において体系的な歴史化は「言語の書記化」という文脈の中で始まる（筆記的歴史化）。筆記的歴史化は、多くの場合、物語的性格を持っているが、部分的にはいくつかの伝統の中においては非常に早くからその歴史化の「方法」についての反省がそこにもなっている（方法的歴史化）。

ヨーロッパの精神史では、十七世紀以降、特にラテン語とドイツ語を中心に歴史化への波のうねりが現れて、それが様々な知識分野に影響を与えるとともに、十八世紀には包括的な哲学史記述へとつながっていった。十八世紀半ば

以降、ラテン語における人文語学における歴史化の構想 (*Historia Itendaria*) から始まって、ドイツ語圏でもヨーロッパという地平をはるかに超えて広がるような歴史化が始まり、それは〈普遍史〉や〈世界史〉という名目のもとで、人類の歴史についての新しい意味構想を呈示した。歴史や哲学などの精神科学の分野において集中的に生じた歴史化は、ヨーロッパの伝統における包括的な歴史的意識をもたらし、その伝統はまた、この歴史記述によつて、〈ヨーロッパ的伝統〉として構成されたのである。十八世紀においてますます「進歩の歴史」として物語られることが多くなる、これらの歴史化においては、ヨーロッパの文化と哲学（例えばヘーゲルにおけるように）が、議論の余地なく、世界の歴史的発展の最先端であるとされている。このようなエリート意識は、二十世紀のヨーロッパにおける精神科学にも痕跡を残している。世界の多くの国々でヨーロッパの科学や大学制度が取り入れられていく中で、このようなヨーロッパ中心主義的な見解は徐々に厳しく批判されるようになっていった。私たちは現在、精神科学が総合的な脱植民地化を目指す過程にいる。この過程を進めて行くにあたり、哲学のうちでも哲学史記述という分野は、グローバルな観点からの批判的言説分析にさらされなければならないのである。

二 歴史化の歴史化

十七世紀以降の哲学史の歴史化への構想において、所々において哲学史の様々な歴史化への反省が見られる。というのも、数を増していく哲学史記述によつて、哲学史が非常に多種多様な仕方、記述され、物語られ、考えられるということがますます明らかになつたからである。このように種々の歴史化を回顧するということは「歴史化の歴史化」として理解されうるものであり、それによつて歴史化という行為自体が反省的に考察されうるものとなる。哲

学の分野の一部としての哲学史記述に加えて、「哲学史の歴史化」という意味で、十七世紀以降さらに、哲学史記述の歴史という反省的なメタ分野が成立したのである。

この哲学史の歴史という研究領域は、ヨーロッパにおいては、一六五九年にフランクフルトで出版されたヨハネス・ヨンジウス（一六二四—一六五九）の *Scriptorius Historiae Philosophicae Libri IV* によって創設された。ヨンジウスは北ドイツ出身であり、ロシュトゥック大学やケーニヒスベルクで教職についていた。死の直前には彼はフランクフルトのギムナジウムの副校長にもなった。彼の著書では主に古代ギリシャ哲学と古代ギリシャ語によるその歴史的継承に焦点があてられている。ヨンジウスは、哲学の各学派を検討し、それらがどの書物を通して伝承されたかを研究している。三冊目の二十章においてのみ、彼は十頁の長さで哲学史を解説しており、そこでは数世紀にわたる哲学の歴史が描写されている⁽¹⁾。そこにはホルニウス、ガウデンティウス、ヴォツシウス、ヘウニウスなどの比較的新しい著者についても註釈がある。ヨンジウスの著書は、全体として、多種多様な歴史的文献に概観を与えようとする試みであり、そこからは当時の哲学史のイメージが形として浮かび上がってくる。それは自己の伝統の歴史的由来へと関心を抱いた偉大なる博識から生み出されたものである。ヨンジウスの著書は一七一六年に第二版が出版されたが、それは当時の議論に重要な刺激を与えた。

一七二五年から一七二五年にかけては、ハレにおいてクリストフ・アウグスト・ホイマンの *Acta philosophorum, das ist gründliche Nachrichten aus der historia philosophica* が三巻十八部として出版された。ここに集成されたテキストは、哲学史を提供しようとするものではなく、哲学史それ自体の意義や範囲を反省することを試みたものである。イエナ大学で学び、のちにゲッティンゲンで教鞭をとったホイマンは十八世紀前半においてドイツでは指折りの著名な学者であった。 *Acta philosophorum* 第一部は「哲学史入門、その効用についての第一章」(Einleitung zur Historia

Philosophica. Erstes Capitel vom Nutzen derselben)とあり、最後はヨンジウスについての第七章、「ヨハネス・ヨンジウスによる四巻の哲学史の記述」(Johannes Jonisii libri IV. de scriptoribus Historiae Philosophicae)という章で終わる。このようにホイマンはヨンジウスからの影響を直接的に継承しながら、さらに多くのテクストによつてそれを敷衍していった。例えば、個々の章において、それぞれディオゲネス・ラエルティウス、スタンレー(2)、グンドリング(3)、ホルニウス(4)、グルニウス(5)、ブルネット(6)、ヴィテニウス(7)などの哲学史が紹介されている。それだけではなく、哲学の個々の学派にも探りをいれて、「女たちにおける哲学についての報告」という長い章を、ヨーロッパ哲学における女性たちに捧げている(8)。ヨンジウスに関する記述の中でホイマンは、ヨーロッパ哲学における初めての歴史記述家となつた女性が存在していたことを断言している。ホイマン曰く、

「スイダスもヨンジウスも最初の *scriptorem Historiae* を正しく指摘することができなかったということに鑑みると、我々はそのことについてそれ以上の確証を得ることができないのではないか、という疑問が生じてくる。この件について読者たちを満足させることを願うならば、ヨンジウス自身が我々にとつて手助けとなるだろう。つまり彼によれば、最初にその道を切り開いたのは、ピタゴラスの妻か娘、あるいは弟子であつたと思われるテアノという名前の女性によるものであつた。いずれにしてもこのうちの誰かが、ピタゴラスについて *de Pythagora* の一冊の書物を執筆したのである。そしてこれは、この学識ある女に、不滅の榮譽を与えるのに十分なものである(9)。」ホイマンは、ヨーロッパ哲学における女性のほかに、ヨーロッパ外部の哲学に対して、個々の章を割り当てている。そこには「古代エジプト人の哲学について」(10)と「中国人の哲学について」(11)という章がみられる。ホイマンのテクストは、体系的に構成されていないが、哲学史記述に関する資料を数多く集めたものであり、それゆえにそれは、哲学史の歴史という分野に含まれるものである。

一七四四年には、エリアス・シュメルザールによる哲学の歴史が、ドイツ語で出版された⁽¹⁾。彼が自らの哲学の歴史についての描写を始める前に、主として十六、十七、十八世紀に由来する四十名の著者による各哲学史が、三十八頁にわたって紹介されている。シュメルザールは体系的な意図をもって哲学史を眺めており、それによって彼自身の記述はより豊かで、また改善されたものとなっている。その後には彼自身の哲学史がユダヤ哲学についての長い章で始まって、さらに続くのが、カルデア人、ペルシャ人、アラビア人、中国人、インド人、フェニキア人、ギリシャ人、ローマ人、キリスト教哲学、そして宗教改革から十八世紀の初めまでの各哲学である。彼の書物は、最後は「トルコ人の世界的叡智」という短い節で終わるが、そこで彼は、一六八六年にダンツィヒで出版されたサムエル・シエルヴェグのラテン語における *Oratio de philosophia Turcarum* を参照にしている。シュメルザールは、彼の本において、当時の通例にしたがって、哲学史についての小史と哲学史を結びつけている。当時において多くの著者たちは、ヨーロッパ外部の哲学からはじめ、その後ギリシャ、ローマ、キリスト教、そして近世の哲学を紹介していたのだ。

しかしながら、十八世紀の後半になると、哲学とその歴史の入門書の新たな種類が登場してくる。ドイツ語において多大な影響力をもった入門書の一つが、ミヒヤエル・ヒスマンの手による『哲学の全分野における精選された文献への知識の手引き』(*Anleitung zur Kenntniss der ausserlesenen Literatur in allen Theilen der Philosophie*)⁽²⁾であり、ゲッティンゲンで一七七八年に出版されている。その目次から浮かび上がってくるのは、この時期においてすでに哲学が様々な分野へと分けられていたことであり、それぞれについてヒスマンは、以下のように紹介している。一．哲学の文献の歴史、二．哲学の歴史、三．歴史の哲学、四．哲学それ自体、五．心理学ないし論理学の文献、六．美学の文献、七．形而上学の文献、八．自然神学の文献、九．普遍的な実践哲学の文献、十．自然法の文献、十一．政治学の文献、十二．哲学的な習俗論の文献、十三．教育学の文献。そして「哲学の歴史」を扱った第二章は、このような問いで始まっ

ている。「論争的な点について暫定的に言及をしておくならば、いわゆる野蛮な諸民族も哲学の歴史のうちに並置することが許されるのか、というものがある」(第十七節)。ここではまたこう語られている。

「多くの哲学史の執筆者は、前六世紀ころのタレスやピュタゴラスの時代におけるギリシャの世界知を起源にして、哲学の全体が発生したものとしている。ただしここで、以下のように問いかけることは、まったく正しいことである。すなわち、この時期の周辺かまたそれ以前に、その他の太古の世界の諸民族が収集し、また保持していた知識も、なぜ同じように哲学的な知識と見なしてはならないのだろうか。非社会的野蛮の状態によつてひとまとめにされるような太古のすべての民族であつても、少なくともそれに固有の、法や宗教的概念の体系、つまりは少なからぬ哲学全体の対象となりうるものもつていたはずではないのか！——もちろんそれらは、このような法律体系や宗教体系を自分で築き上げたのかもしれないし、それ以前にそれを培つた他の近隣の民族から継承したのかもしれない。しかし実際に、これらのいわゆる野蛮人たちの宗教体系のうちにも、我々がそれを探求できるかぎりにおいて、世界やその発生、神性やその人間への関係についての、思弁的理性の働きによる複雑な問いかけが、織りこまれていたのである。こういつた対象に対するそれらの思想は、最古のギリシャ哲学者たちの思弁においてそうであつたように、時に深遠であり錯綜した思案の痕跡であり、それはまた世界の起源や人間の性についての説明上の仮説、神々の自然本性についての観念を含んでいる——ではなぜ、自らの国家や宗教の体制について洗練された文化をもつた、これらの太古における民族のすべてに關して、それらを信頼ある歴史記述者の手による何らかの報告や報告の断片、哲学史の対象と見なしてはいけないということになるのだろうか」。(S. 31f.)

このような判断基準に対応するかたちで、ヒスマンの本では九十頁にいたるまで、さまざま哲学史の領域が取りいれられることになつてゐる。まず多様な種類の哲学史が手短かに言及され、そして特徴づけされているが、なかでも数

ある所産のうちで、以下のものが含まれている。「エジプトの哲学」(第二十四章)、「カルデアの哲学」(第二十五章)、「ペルシャ人の哲学」(第二十六章)、「インド人の哲学」(第二十七章)、「中国人の哲学」(第二十八章)、「日本人の哲学」(第二十九章)、「フェニキア人の哲学」(第三十章)、「ケルト系民族の哲学」(第三十一章)。その後が続いているのは、ギリシヤやユダヤ教やスコラ哲学(アラビアも含む)と近代哲学における歴史記述家についての詳細なる情報である。全体としてヒスマンが提供しているのは哲学史の歴史であり、それはヨーロッパという枠組みを超える地点へと到達した初めてのものである。

ヒスマンが第二章だけで包括しようとしたものが、ヨハン・アンドレアス・オルトロフにおいては、一冊の本にまで拡充されている。その本とは、一七九八年にエアランゲンで出版された哲学の歴史の文献案内である。オルトロフは、ヒスマンと同じように、ヘブライ人、カルデア人、ペルシヤ人、アラビア人、エジプト人、インド人、中国人、日本人、フェニキア人などの、ヨーロッパ外部の伝統から、その本を始めている。ヨーロッパの伝統がそれに続き、そこではアラビア人たちにもう一章が当てられている。オルトロフの本は一方においては哲学史の歴史であり、他方においては当時に入手可能であった哲学の歴史についての広範にわたる文献目録であった。

またその後すぐに、同様の要求を掲げたより包括的な本が公刊されている。一八〇七年レムゴで出版されたヨハン・ハインリヒ・エルネステイの『一般的な哲学史とその文献の百科事典的案内』である。その本には「世界全体の知の歴史を包括した浩瀚なる作品」と銘打たれた章があり、そこでエルネステイは、彼の時代にあつてはもつとも包括的な哲学の歴史を呈示し、またそれを特徴づけている。ヨーロッパだけに狭められた「哲学の歴史」のイメージが哲学史描写の全体へと徐々に浸透していき始めることによつて、この本をもつて哲学史の歴史についての拡充された考察の伝統は、いったん断絶してしまふことになる。一八五〇年頃からは、「古代」、「中世」、「近代」という図式

に則した、「ヨーロッパ哲学の歴史」だけが、ほとんど出版されるようになる。ここでそのパラダイム的な役割を果たしているのは、フリードリヒ・ユーンバウヴェクによる三巻の『タレスから現代までの哲学の歴史の大綱』（一八六三—一八六六）である。この作品は、何世代もの学者たちに影響を及ぼし、出発点としてはなお今日でも、哲学の歴史についての私たちのイメージに刻印されている。ヨーロッパ人たちが哲学の歴史をヨーロッパだけに限定したまさにその時代に、日本人がヨーロッパ哲学を受容し始めたというのは、歴史の皮肉というものである。そうして日本人は、ヨーロッパのみにだけ存在していた哲学の歴史のイメージを継承したのである。その数十年前に日本人の哲学がヨーロッパの哲学の歴史のうちに組み込まれていながらもかかわらず、日本においては、一八世紀半ば以来の、哲学の歴史のヨーロッパ中心的なイメージが受け継がれ、それが今日にいたるまで日本では影響を及ぼしているのである。

これまで挙げられた作品が示しているのは、「哲学史の歴史」というメタ分野は、最初にドイツにおいて発明されたものであり、それは二十世紀の初頭において初めて、さらなる展開をしていったものであるということである。

三 二十世紀以降における哲学史記述の歴史

私の知っている、ドイツ語圏における「哲学史の歴史」というタイトルを持つ最初の著書は、一九一二年に出版されたヨハネス・フライヤー (Johannes Freyer) による作品である⁽¹⁾。フライヤーは、その後国家社会主義に接近した。この著書をもって、彼は「哲学史記述の歴史」という分野を二十世紀において新たに創設したのであるが、それは一九七〇年以後になって初めて、フランス語とイタリア語において継続的に研究されるようになった。この名を付された分野はそれ以来、フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語において様々な名称で展開されている。

ドイツ語

哲学史の歴史

哲学の歴史の歴史

哲学史記述の歴史

英語

哲学の歴史の歴史学

哲学の歴史の歴史

フランス語

哲学の歴史の歴史

イタリア語

哲学の一般史の歴史

哲学歴史学の歴史

世界の多様な言語の地平における「哲学史」の歴史〔エルバーフェルト〕

一九七〇年代以来、哲学史の記述の歴史は、ヨーロッパ哲学の伝統においては、以下の三つの長大なる試みによって描かれている。

- 一．第一の試みはルシアン・バウム (Lucien Baum) によるもので、ヘーゲルの思想までが含まれている。
・ルシアン・バウム、「哲学史の歴史」、パリ、一九七三年。Lucien Braun: Histoire de l'histoire de la philosophie. Ophrys, Paris 1973. ⁽¹⁴⁾
- 二．第二の試みは、マルシャル・ゲルー (Martial Guerout) によるものである。
・マルシャル・ゲルー、「哲学史の歴史、西洋におけるその誕生からコンディヤックまで、第一巻」、パリ、一九八四。「ドイツ、ライプニッツから今日まで、第二巻」、パリ、一九八八。「フランス、コンドルセから今日まで、第三巻」、パリ、一九九二。Martial Guerout, Histoire de l'histoire de la philosophie: En Occident, des origines jusqu'à Condillac, Bd. 1, Paris 1984; En Allemagne, de Leibniz à nos jours, Bd. 2, Paris 1988; En France, de Condorcet à nos jours, Bd. 3, Paris 1992.
- 三．第三の、これまでに於いて最も包括的な試みは、ジョバンニ・サンティネッロによつて着手されたものであり、それは十九世紀の末までに到達しながら、最後にはロシアまでが含まれている。

- ・ 1. 「ルネサンスの起源から『ヒストリア・フィロソフィカ』まで」、ブレッシア、一九八一年（ボッティン・フランチェスコ） *Dalle origini rinascimentali alla "Historia Philosophica"*. Brescia: La scuola 1981. (Bottin Francesco)
- ・ 2.1 「デカルトの時代からブルッカーへ」、ドイツにおける哲学の一般史「ブレッシア」、一九七九年（ロンゴ・マリオ） *Dall'età cartesiana a Brucker. Le storie generali della filosofia in Germania*. Brescia: La scuola 1979. (Longo Mario)
- ・ 2.2 「デカルトの時代からブルッカーへ」、フランスとイタリアの哲学史、一六五〇年から一七五〇年「ブレッシア」、一九七九年（ピア・グレゴリオ） *Dall'età cartesiana a Brucker. La storia della filosofia in Francia e in Italia, 1650-1750*. Brescia: La scuola 1979. (Piaa Gregorio)
- ・ 3.1 「後期啓蒙主義とカントの時代一」、ブレッシア、一九八八年。II secondo illuminismo e l'età kantiana I. Brescia: La scuola 1988.
- ・ 3.2 「後期啓蒙主義とカントの時代二」、ブレッシア、一九八八年。II secondo illuminismo e l'età kantiana II. Brescia: La scuola 1988.
- ・ 4.1 「ヘーゲルの時代一」、ドイツ圏の哲学史学「パドヴァ」、一九九五年。L'età hegeliana I. La storiografia filosofica nell'area tedesca. Padova: 1995.
- ・ 4.2 「ヘーゲルの時代二」、新ラテン語圏・ダヌビア・ロシア地域における哲学史学「ブレッシア」、一九九五年。L'età hegeliana II. La storiografia filosofica nell'area neolatina, danubiana e russa. Brescia: La scuola 1995.
- ・ 5. 「一九世紀後半」パドヴァ、二〇〇四年。II secondo ottocento. Padova: Antenore 2004.

ブラウンとサンティネロの構想は、十九世紀までにおよび、ラテン語、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語、イタリヤ語の哲学史の記述が含まれている。

ゲルールの試みだけが二十世紀半ばにまで達している。サンティネロの試み以来、様々な言語における哲学史記述の歴史を描写し、それを言説理論的に研究するような体系的な試みは行われていない。

四. 哲学史記述へ向けた間文化的でグローバルな視点設定

二十世紀には、グローバルな視点から哲学史を構想しようとする試みが、いくつか生じてきた。以下に例をあげてみたい。

- ・ 著者団体（編）、哲学史、全五巻。ベルリン。一九五九・一九六三。（原著はロシア語で、ドイツ語、中国語、韓国語、日本語、スペイン語に訳されている）。

Autorenkollektiv (Hrsg.): *Geschichte der Philosophie*. 5 Bände. Berlin: VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften 1959-1963. (Ursprünglich in Russisch. Übersetzt ins Deutsche, Chinesische, Koreanische, Japanische, Spanische

- ・ ジョン・プロット、「世界的哲学史」、全五巻。デリー、一九六三—一九八九。

Plotf, John C.: *Global History of Philosophy*. 5 Bände. Delhi: Motilal Banarsidass 1963-1989.

・中村元、「比較思想史、並行的発展」、一九七五。(15)

Nakamura, Hajime: *Parallel developments. A comparative History of Ideas*. Tōkyō: Kodansha 1975.

・ニニアン・スマート、「世界哲学」、一九九九。

Smart, Ninian: *World philosophies*. London: Routledge 1999.

一方、グローバルな方向づけをもった哲学史の記述の構想は、中国語、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、日本語、韓国語、ロシア語、スペイン語、トルコ語、そしておそらくその他の言語においても、見られるようになった。哲学史の構想を問文化という立場からも反省し、批判するという最近の試みは以下の例にみられる。

・フランツ・マルティン・ヴィマー、「問文化哲学、歴史と理論」、一九九〇。

Franz Martin Wimmer, *Interkulturelle Philosophie. Geschichte und Theorie*, Wien 1990.

・ハミド・レザ・ユセフイ、「問文化性と歴史、グローバルな哲学への観点」、二〇一〇。

Hamid Reza Yousefi, *Interkulturalität und Geschichte. Perspektiven für eine globale Philosophie*, Reinbek 2010.

グローバルに方向づけられた哲学史記述の方法については、最近になってようやく、より広範な哲学的議論の主題と

なった。

・ハミド・レザ・ユセフイ、ハイントツ・キメール（編）、「変わりゆく世界における哲学と哲学史記述、理論、問題、観点」、二〇一一。

Hamid Reza Yousefi, Heinz Kimmertle (Hg.): Philosophie und Philosophiegeschichtsschreibung in einer veränderten Welt. Theorien – Probleme – Perspektiven. Nordhausen 2011.

五 世界の多様な言語に基づく哲学史記述の歴史化

哲学することという活動は、すべての自然言語において始まりうる。同時にまた、学術的な哲学がそれによつて営まれうるような言語も、ほぼ果てしないといつてよいほど存在する。ヨーロッパの伝統においてのみでも、十四世紀までに、すでに四つの言語が哲学の正典言語として使われている。古代ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語、アラビア語がそれである。十四世紀以降、哲学の正典言語にはイタリア語、スペイン語、フランス語、英語、ドイツ語、ロシア語も含まれるようになる。ヨーロッパという地平の向こう側を眺めれば、さらに言語の数は増大していくことになる。サンスクリット語、中国語、ペルシャ語、チベット語、韓国語、日本語、タイ語、インドネシア語、トルコ語やその他の言語などが、相対的に大きな哲学の言語として視界に入ってくる。ここ挙げられたすべての言語において「哲学史」は存在しているが、ここで名をあげた言語の多くにおいて、哲学史は、今までまだ体系的に吟味され、研究されてもいない。その他、インド哲学、中国哲学、仏教哲学、日本哲学における哲学史記述は、さまざまな言語を

基盤としてつづき連関させあつた仕方ではまだ体系的に研究はされていない。このように多様な言語を含む研究へと視野を広げるといふことは、「哲学」といふ言葉によつてまずもつて何が理解されるべきかについての新しい地平を開拓することであり、それには哲学史記述への方法について新たなことが考案されなくてはならない。

このような研究の地平を開拓するために、二〇一六年のドイツ、ヒルデスハイム大学における「グローバルな視点における哲学史記述」といふ学会においては、ラテン語、ドイツ語、フランス語、中国語、日本語、アラビア語、ヘブライ語やその他の言語における哲学史記述が検討された。その結果が以下に収集されている。

ロルフ・エルバーフェルト（編）、「グローバルな観点からの哲学史記述」、二〇一七。

Rolf Elberfeld (Hg.): *Philosophiegeschichtsschreibung in globaler Perspektive*. Hamburg 2017.

このような視点を出発点として、書記的な形式において哲学史記述を生み出してきたすべての言語における哲学史記述を考察することは、今まで検討されなかつた方面に「哲学史記述の歴史」の分野を広げる、ということである。こうした新しい立場からの研究を可能にし、その枠組みに輪郭を与えるためには、できるだけ広範囲にわたる多様な言語における文献の収集が必要である。各言語における文献のコレクションだけを見ても、その描写や方法において様々な問いが投げかけられる。そしてヨーロッパの哲学史に関する文献に限らず、タイトルに「哲学史」といふ表示があるもの、また広義にわたつて「思想史」と理解できるすべての単著（ただし単著のみに収集は限定されている）がすべて収集されることによつて、それらの資料に基づいたさまざまな区別が導入され、またその区別によつて、ドイツ語、英語、中国語、日本語、ロシア語、トルコ語などにおける哲学史的な知の形成の「パターン」が捉えられ

るようになる。そして、その際に導入された区別は、各言語の内部において反省的に検討されなくてはならない。というのも、この「知の形成のパターン」は自然的にあるものではなく、それぞれに長所と短所をもった区別を資料のうちにもちこむものだからである。これらの問題は、各言語内での分別の方法への反省において批判的に議論されなくてはならない。

六 新しい研究への展望

これまでの文献収集からは、以下のテーマにおいて、さらに詳しい専門研究が必要であることが明らかとなった。

一. 多様な言語における古来の（十六世紀以前）学説編纂的、哲学史的描写と反省。サンスクリット語、ギリシャ語、アラビア語、ペルシヤ語、中国語、ラテン語、日本語、ヘブライ語、チベット語など。

研究課題 これらの多様な言語においてどのような歴史記述的観点と方法が構築されたのか。

二. 一八〇〇年までにおけるラテン語とドイツ語の哲学史における非ヨーロッパ哲学の包含。一八〇〇年まではインド、カルデア、エジプト、ペルシヤ、アラビア、中国、日本、アフリカなどの哲学を哲学史の記述に含むのが常例としてあった。

研究課題 厳密にはどの地域と分野が含まれていたのか。

三、十九世紀初頭以来、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語での哲学史においては、哲学的論証にもとづいてヨーロッパ外部の哲学は次第に排除されるようになっていった。

研究課題　そこでどのような論証が重要な役割を果たしたか。排除の戦略としては、どのようなものが観察されるのか。

四、十九世紀において、狭義の哲学の分野の外部にあつて、インド学や中国学やアラビア学やユダヤ学や日本学などの文献学を起点として、ヨーロッパ的言語の内部では、ヨーロッパの外部の思想についての哲学史が生まれてきた。

研究課題　ヨーロッパのどの文献学的伝統の中で、中国、インド、アラビア、ユダヤ教などの哲学史が記述されたのか。どのような哲学的、科学的、政治的な関心がそこで追求されたのか。

五、二十世紀以降において、ポーランド語、ロシア語、ハンガリー語、日本語、中国語、アラビア語、韓国語、ペルシャ語、トルコ語など、ヨーロッパ、非ヨーロッパの多くの言語において哲学史が生まれている。

研究課題　どの哲学的伝統がそこで影響力をもち、個々の言語での哲学史記述における部分的に拡大された視点によって、どのような仕方では哲学は新たに組織化されたのか。

様々な哲学における（主要な）言語（アラビア語、中国語、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、日本語、韓国語、ポーランド語、ロシア語、スペイン語等）による二十世紀、二十一世紀における哲学史記述に関する個別研究。

六、哲学史記述における哲学の「国民国家化」が観察され、それはまた同時に哲学の伝統の差異化と並行している。イギリス、フランス、ドイツ、日本、中国、インド、トルコ、ハンガリー、メキシコなど、哲学は部分的に国民国家と言語の境界において分類され、哲学史においてこのような（国民国家別の）名称で表示されている。研究課題 哲学の「国民国家化」とは、哲学全般において、そして特に哲学史記述においてどのような意味を持つのか。

七、ヨーロッパ哲学史における女性哲学者に関する集中的な研究活動が盛んになった現在、ヨーロッパ外部の言語的伝統における女性哲学者に関する問いが立てられる。

研究課題 様々なヨーロッパ外部の言語的伝統において女性哲学者はどのような位置を占めるのか。どのような基準や視点から、ヨーロッパ外部の言語的伝統における女性哲学者を探索し判別するのが有意義で適切であるか。

八、哲学史記述は今まで書記的伝統を中心に研究されてきたが、さらにまた口承的伝統における思想や哲学も哲学史記述に含むことができるか、という問いが立てられる。

研究課題 哲学することの口承的伝統はどのように哲学史に取り入れることが可能か。

九、現在すでにグローバルな観点から書かれた哲学史記述への考案が多く存在し、それはすでに専門の研究分野と

なっている。しかし、それらはどのような選択基準によりグローバルに拡大された視点を要求できるのか。これまで「グローバルな哲学史記述の歴史」というものはなおも存在しておらず、そこにまさに研究上の欠陥がある。

研究課題 どれほど多くの言語においてグローバルな方向づけをもった哲学史がすでに存在しており、またそれらはどのように構成されているか。

この最後に挙げられた研究上の観点によるならば、グローバルな視点からの哲学史記述の歴史の研究とは、同時にまたグローバルな視点における哲学の未来とはどのようなものでありうるかを哲学的に考察することでもあることになる。ここで以下のような問いが立てられる。

- 一、様々な言語による様々な哲学史のうちにあつて、「世界的な文化遺産」としての「哲学」について語ることはできるのか。
 - 二、どの作品が哲学の正典とされ、哲学の分野で読まれるべきなのか。
 - 三、将来大学において、哲学はどのように教育され、どのように研究されるべきか。
 - 四、様々な思想的伝統において問題となつているあるものを名づけるために、新たな名称が求められるべきなのか。
- これらの問いに今すぐには答えられないとしても、哲学が、大学における分野として、グローバルな視点から、二十一世紀に根本的に変革され、また拡大されることは確実なことである。

注

- (一) „Viri Docti, qui sequentibus seculis Historiam nostram Philosophicam illustrarunt, breviter&cursorum attiguntur.“ 308.
- (二) Thomas Stanley: *The History of Philosophy*, in *Eight Parts*. London: Humphrey Moseley and Thomas Dring 1655 – 1660, lateinische Übersetzung im Jahr 1711.
- (三) Nicolaus Hieronymus Gundling, *Historiae philosophicae moralis pars prima*. Halae 1706.
- (四) Georgius Hornius, *Historiae philosophicae libri VII, quibus de origine, successione, sectis et vita philosophorum ab orbe condito ad nostram aetatem agitur*. Lugduni Batavorum 1655.
- (五) Johannes Grunius, *Philosophiae origio, progressus, definitio, divisio, dignitas, utilitates, quas vitae humanae et ecclesiae confert, et cetera proplemomena pleraque de philosophia generalia quae librorum philosophicorum explicationi praemitti solent, praefationis loco recitata*. Wittebergae 1587.
- (六) Thomas Burnet, *Archeologiae philosophicae, seu doctrina antiqua de rerum originibus libri duo*. Londini 1692.
- (七) Henningus Wittenius, *Compendium historiae philosophicae*. Gedani 1677.
- (八) 12. Stück, 1. Kapitel, 825-875.
- (九) Heumann, *Acta philosophorum, a.a.O., Bd. 1, 1. Stück, 7. Kapitel, S. 178*.
- (十) Heumann, *Acta philosophorum, a.a.O., Bd. 3, 11. Stück, 1. Kapitel, 659-696*.
- (十一) Heumann, *Acta philosophorum, a.a.O., Bd. 3, 11. Stück, 4. Kapitel 717-786*.
- (十二) Elias Schmersahl, *Historie der Weltweisheit überhaupt. Nebst einem Vorbericht von den bisherigen Verfassern der Historie, Zelle 1744*.
- (十三) Johannes Freyer, *Geschichte der Geschichte der Philosophie im achtzehnten Jahrhundert*, Leipzig 1912.
- (十四) Deutsche Übersetzung: Lucien Braun: *Geschichte der Philosophiegeschichte*. Übersetzt von Franz Wimmer, bearbeitet und mit einem Nachwort versehen von Ulrich Johannes Schneider, Darmstadt 1990.
- (十五) 文献は英語で出版された。